

Sons And Lovers : 歪められた愛の姿

内 藤 歆 修

D. H. Lawrence の初期の小説中、最も注目に値する作品である、第三作 *Sons and Lovers* は、1910年10月には着手されている。この作品についての最初の言及は10月8日付の、Heinemann 社の Sydney Pawling 宛の手紙⁽¹⁾に見られる。この時点で彼は今書いている作品の ‘about one-eighth’ が完成し、内容は ‘a florid prose poem’ でも ‘a decorated idyll’ でもないと言っている。これは彼の頭の中で小説全体の分量が充分形を整えていることを暗示し、内容的には前二作とはその傾向が違うことを明らかにしている。

最初 Paul Morel と名付けたこの小説を *Sons and Lovers* と変更したのは、完成一ヶ月前の1912年10月のことである。Edward Garnett 宛の手紙⁽²⁾に I have done 3/5 of Paul Moerl. Can I call it *Sons and Lovers*? とある。この Garnett は当時 George Duckworth 社の編集をしており、Lawrence の後援者となってくれた小説家であった。彼の批評は上辺だけのものではなく作品の構成に迄及ぶ苦言でもあったので、Lawrence はその助言を大いに取り入れ、*Sons and Lovers* の推敲の過程に於いても積極的に活用している。この作品を Duckworth に送った翌日 Lawrence は彼に手紙⁽³⁾を書き、 I wrote it again, pruning it and shaping it and filling it in. I tell you it has got form-*form* : haven't I made it patiently, out of sweat as well as blood. と一つの仕事を終えた満足の気持を表明し、次に、この作品を論じる際によく引用される、テーマと筋書きを簡潔に要領よく述べている文章が続く。少し長いがここに引用する。

It follows this idea : a woman of character and refinement goes into the lower class, and has no satisfaction in her own life. She has had a passion for her husband, so the children are born of passion, and have heaps of vitality. But as her sons grow up she selects them as lovers—first the eldest, then the second. These sons are *urged* into life by their reciprocal love of their mother—urged on and on. But when they come to manhood, they can't love, because their mother is the strongest power in their lives, and holds them.—It's rather like Goethe and his mother and Frau von Stein and Christiana—. As soon as the young men come into contact with women, there's a split. William gives his sex to a fribble, and his mother holds his soul. But the split kills him, because he doesn't know where he is. The next son gets a woman who fights for his soul—fights his mother. The son loves the mother—all the sons hate and are jealous of the father. The battle goes on between the mother and the girl, with the son as object.

The mother gradually proves stronger, because of the tie of blood. The son decides to leave his soul in his mother's hands, and, like his elder brother, go for passion. He gets passion. Then the split begins to tell again. But, almost unconsciously, the mother realises what is the matter, and begins to die, The son casts off his mistress, attends to his mother dying. He is left in the end naked of everything, with the drift towards death.

母の強い愛に魂を支配され、他の女性を恋人に出来ない悲劇を“the tragedy of thousands of young men in England”⁽⁴⁾として捉えようとしたこの作品は、自らの魂が母親の支配下にあり、精神的に窒息死寸前の状態にあった Lawrence 自身の現実⁽⁵⁾に直面する苦悩を如実に物語るものであった。先の荒筋を説明した手紙にもあるように、はっきりした筋の展開を持つこの小説は、明らかに彼の半生の忠実な描写である。もちろんフィクションであるので、事実とは多少の相異があるにしても、大綱には変りはない。

Sons and Lovers は二部十五章より成り立っている。第一部は Morel 夫妻の ‘The Early Married Life’ の頃、即ち Lawrence 自身がモデルである Paul 出生以前から、彼の兄 William の死、彼自身が肺炎にかかり、その危機を脱したところ迄、第二部は母の Paul に対する執着、Miriam との葛藤、母の死迄が扱われている。

この小説が始った時点で、Paul の母親 Gertrude は三十一歳、結婚して八年になる。ノッティンガムの中産階級の古い良家出身で、小柄な体格は母から、また澄んだ挑戦的な青い眼と秀でた広い額、美しい手、そして誇り高い不屈の精神は、父の George Coppard から譲られたものであった。代々熱心な清教徒であり、服装は質素で飾ることはなかった。私立学校で教えたこともあり、教育のある男と宗教、哲学、政治などについて話し合うのが好きであった。その彼女が二十三歳の時、クリスマス・パーティで一人の魅力的な抗夫と出会った。彼は Walter Morel と言い、二十七歳の堂々とした体格の持ち主で、光沢のある縮れた髪の毛と見事な黒いあごひげをしていた。彼のよく鳴り響く笑い声、人ざわりのよさ、そしてろうそくの炎のように肉体から流れ出る官能的な生命の炎のくすんだ金色の軟かさに彼女は引きつけられた。それは官能的な喜びをすべて無視する、禁欲的で厳格な清教徒的生き方をしている彼女の父の姿とは全く違った魅力であった。

Gertrude は Walter Morel にとって上流階級の神秘と魅力とを兼ね備える淑女であり、その話す言葉は南イングランドの純粋な発音であった。彼はそれを聞いていて身体がぞくぞくし、彼女の前で自分が溶解するような感じとなった。しかし精神主義的な Gertrude と何の装飾もつけていないありのままの肉体の具現者 Morel は最初お互いに強くひかれ合うが、やがて反発し、憎しみ合うようになる。ここに後に Lawrence の重要なテーマとなってゆく精神と肉体の相克と調和という問題の原型が、Gertrude と Walter の結婚とその破綻という形をとって提示されている。

六ヶ月間の幸福な結婚生活の後、夫が妻に家具の未払いの請求書を秘密にしておいたのが発覚

した。それ以来、誇り高き、名誉を尊ぶ彼女の心の中の何かが岩のように固く結晶してしまった。彼女の幻滅の苦痛が耐え切れぬ程強くなった時、長男 William が生れた。この赤ん坊を彼女が熱愛し、大事にすると、父親はそれに嫉妬する。そんな彼を Gertrude は軽蔑し無視するようになる。Walter は家庭での不愉快な気持を酒でまぎらわす。このようにして何時終るともない夫婦の恐しい血なまぐさい戦いが始った。そして Morel が妻に無断で William の巻き毛を刈り込んでしまった時に、殆ど決定的な破局がやって来た。それを境に、彼は結婚以来守って来た禁欲的生活をやめ、飲酒の禁を破り、酒代を妻からくすねたりするようになった。当然夫のこういう行為を妻 Gertrude は清教徒的道義心から赦さない。彼女の宗教的本能は余りにも狂信的で、夫が自分の理想に近づくようにと強制するのである。それはあらゆる面に於ける彼女の行動様式の根幹をなしていた。貧しい生活を切りつめたり、夫には義務を自覚させ、道徳と宗教心に目覚めさせようと努め、自分が望む高さに迄到達させようと、彼を強要し強制し続けたりしたのは一重にこの清教徒としての信念である。しかしそれに応えるには、彼は余りにも官能的であった。

She fought to make him undertake his own responsibilities, to make him fulfil his obligations. But he was too different from her. His nature was purely sensuous, and she strove to make him moral, religious. She tried to force him to face things. He could not endure it—it drove him out of his mind. (I,1)⁽⁶⁾

彼女は夫が自分なりに努力しているのには満足出来ず、また彼が彼女の強制に耐え切れず、心をうつろにしていることに気付かなかった。そして遂には彼を「破滅」させてしまうのである。

作者は Gertrude を敬虔な清教徒、清らかな精神主義の女性として肯定的に描こうとしているが、彼女の夫に対する態度は必ずしもそうなっていない。夫の飲酒に関しても、自分が乏しい収入のなかで節約しているのに、夫が酒にひたっているのは罪以外何ものでもないと考ええる。これは清教徒主義の一つの帰結でもある勤勉によって生活の安定を計る物質への志向が露呈したものであり、彼女の物質的欲求に対する偏重という性向が示されたものと言えよう。

母 Gertrude は子供にも自分の考え方、生き方を意識的にも無意識的にも押しつけて行く。Walter は妻には悪い夫であり、子供にはひどい父であるように描かれている。彼が非難される時は妻であれ子供であれ、常に家族の目があり目撃されている。作者は明らかに Gertrude の側に立ち、Walter に対する限り作者の視点と彼女のそれとが潜在的に一致し、Morel は一方的に揶揄され戯画化されている。作者の示す夫と妻に関する様々な場面は、出来る限り夫と妻とが正当に評価される努力がなされているにも拘らず、そこに作者が闖入し要約的説明を始めると、母親の方は断然有利となり、父親が不利な立場に置かれてしまうという、作者 Lawrence(=Paul) のヴィジョンに混乱がしばしば生じることとなる。夫婦間の葛藤が述べられている次の文章を引

用してみよう——

The pity was, she was too much his opposite. She could not be content with the little he might be ; she would have him the much that he ought to be. So, in seeking to make him nobler than he could be, she destroyed him. She injured and hurt and scarred herself, but *she lost none of her worth.* (I,I) (italics mine)

それ迄に読者には知らされていない「彼女の美点」について作者の説明が加えられて、母親の立場をよくしようという試みがなされている。父親については、この逆の現象が現われる。彼は家族の除け者である。

Conversation was impossible between the father and any other member of the family. He was an outsider. He had denied the God in him. (I,IV)

この説明の次の文章から、父親が家族の生活に入って行き、子供達を相手に家のまわりの仕事を楽しくやり、子供達もそれを心から喜んで手伝ったりする場面が描かれる。そして作者が Walter から距離を保っている時は、彼を戯画化するのとは正反対に、Walter に密着して彼を描く場合には作者の彼に対する愛情がにじみ出る描写となる。また例え家族の者に対して粗暴な振舞いをしたとしても、Walter は Paul が気管支炎で寝ている時は優しい父親である。このように作者が肉親を描く時に、そのヴィジョンにずれが出て来るのは読者を困惑させるには違いないが、それは半面、Morel 夫妻の結婚の複雑さを際立たせる巧妙な手法に、期せずして、なっているとも言えよう。

妻 Gertrude は夫を自分の尺度に当てはめ、自分の理想に近付けようとして失敗し、夫に幻滅する。狂信的な迄の清教徒となり、余りにも精神主義的になってしまった彼女は、夫の中の原始的な生命を受けとめることが出来ず、逆に、出来ない責任を夫に転嫁してしまう。更に夫から本当の男としての、また家庭の父たる特質を引き出したり、助長したり出来ず、夫に自信を失わせて自壊させてしまうのである。

Morel 夫妻の人物設定は第一章から第四章あたりで終り、結局二人の関係の破綻原因が作品の中では明瞭に決定付けられぬままに、母親と息子との関係へと話題は転換してゆく。だが第二部第二章に於いて、突然再び父親 Walter が中心人物として、まるで小春日和のような夫婦の間の平和な瞬間が現われる。Gertrude が夫の身体をたった一度だけ洗ってやる場面で、夫の身体が美しかったことに言及する——

“You’ve had a constitution like iron”, she said ; “and never a man had a better start, if it was body that counted. You should have seen him as a young man”, she cried suddenly to Paul, drawing herself up to imitate her husband’s once handsome bearing.

Morel watched her shyly. He saw again the passion she had had for him. It blazed upon her for a moment. He was shy, rather scared, and humble. Yet again he felt his old glow. And then immediately he felt the ruin he had made during these years. He

wanted to bustle about, to run away from it, (II, VIII)

ここでも Walter を「逃げ出したかった」気持ちにさせたのは作者自身である。妻が結婚に際して惹かれた夫の男性的な身体の美しさを思い出し、一瞬情熱を燃え立たせる。この場面は Walter と Gertrude がかつて持っていて、今は失ってしまったものが何であったかを感動的に思い起させるのであるが、またもや作者の闖入によって、それを失ってしまった責任は Walter の側に全てであるとされる。だが実際は Morel 夫妻がお互いに対して真の愛情をなくした故に、結婚生活に破滅がやって来たのである。より公平に言えば Gertrude が夫の肉体的美質の価値を否定し、情熱を失くしてしまったが故の破滅とも言えよう。この引用にも見られるように Walter にはちょっとした思いやりにも反応する、素朴で純真な人の好きがある。一方 Gertrude についての 'Mrs. Morel did not like the wakes.' (I, I) という文章とか 'Coward as death' (おそろしく冷たい) (II, VIII) と Walter が Gertrude のことを評す言葉などは、必ずしも彼女の真相を全て暴露したものではないにしても、読者に迫力を以て Gertrude 像の一端を想像せしめるのに充分である。しかしここでは妻 Gertrude (と作者) によって、教養のある女と坑夫という階級的、社会的差が、精神と肉体、善と悪、人格的な優劣などといった異ったレベルの差に置き換えられたり、歪曲されたりしている。即ち彼らは夫(又は父)を貶めることによって妻(又は母)の優位を更に増しているのである。

作者は両親に対する極端な偏見(母への過大評価、父への過小評価)の余り、母の欠点は見えず父のそれに多く目が行く。そして父の意識に割り込んで父の弱点を暴露したり反省させたりして、父の性格の弱さを客観化しているにも拘らず、母 Gertrude の内面生活については作者自らによっても作品によっても殆ど探られていない。Gertrude が自分達の結婚生活の崩壊に関して何処迄責任があり、それに対してどの程度迄内面的に報いを受けているのかも明らかにされていないのである。

夫婦がこのように心が離れて行くにつれて、Gertrude の関心と愛情は息子に向って行く。最初は William に、そして次には Paul に。William は家族の、特に Gertrude の期待を一心に背負って成長し、二十歳の頃にはロンドンで可成り良い職に就くことが出来た。だが母に魂を完全に支配されていた彼は、女性に対しては、只、性的な面でしか交際出来ない。それ故派手で軽薄で、その上無教養な娘 Lily Weston と恋に落ち婚約する。そこで母と Lily との間に立って彼は苦しみ、遂には精神と肉体の相克に疲れ果て、肺炎と丹毒にかかり簡単に死んでしまう。作者の言葉によれば、'William gives his sex to a fribble, and his mother holds his soul. But the split kills him, because he doesn't know where he is⁽⁷⁾.' のである。William についてのこの挿話は Paul の将来に避け難い運命を暗示する暗い前兆となっている。

William が死ぬ前の Paul と母親の関係も将来の彼らの強い結びつきを示す徴候が幾つか見える。母は Paul の顔の中に 'the peculiar knitting of the baby's brows' や 'the peculiar heavi-

ness of its eyes' などを認める。母の苦悩する心の状態が赤ん坊の澄んだ心の鏡にはっきりと映し出されているのである。Gertrude は夫 Walter への愛情を失くし、その代償として息子に、夫に求めるべきものを求めていた。母と Paul は切っても切れない血の繋がりで結びついていることを示す出来事が起る。或る日、例によって Walter が酒に酔って、夜遅くなって帰って来る。夫妻は小ぜり合いを起し、Walter がカッとなり引き出しを妻の額に投げつけて血を流させてしまう。彼は妻の顔をのぞき込む――

As he looked at her, who was cold and impassive as stone, with mouth shut tight, he sickened with feebleness and hopelessness of spirit. He was turning drearily away, when he saw a drop of blood fall from the averted wound into the baby's fragile, glistening hair. Fascinated, he watched the heavy dark drop hang in the glistening cloud, and pull down the gossamer. Another drop fell. It would soak through to the baby's scalp. He watched, fascinated, feeling it soak in; then, finally, his manhood broke. (I, 11)

母親の血が赤ん坊の頭の肌に浸み込んで行くのを想像した Walter の 'manhood' は崩壊し、他方では母子が血で結び付いた、今後の物語の行方を暗示する象徴的な場面である。これを機に母子の結び付きは更に強まって行き、父親の存在は片隅に追いやられる。'manhood' を失ってしまった Walter は酒代に困った時、妻の財布から小銭を盗んでそれを咎められ、家出をする。だがそんなことは出来ないと妻に見すかされ、実際に夜になると戻って来る。彼の存在感は薄れ、話題は専ら息子達に移って行く。

Gertrude にとって関心の対象は、夫に代って息子達になる。母は夫で果し得なかつた夢を息子達に託す。彼らには献身をおしまない。彼らもそれに出来る限り応えるように努力するが結果は無残である。William はロンドンで急死してしまい、Paul は大病にかかってしまう。

だが William に先立たれて茫然自失状態の母を救ったのは、皮肉にも Paul のこの重い肺炎であった。Paul と母との強い結び付きは、この試練を経て確固たるものとなった。

The two knitted together in perfect intimacy. Mrs. Morel's life now rooted itself in Paul. (II, vii)

こうして Gertrude は我に返り生氣を取り戻した。物語もここ迄で Paul の幼少時代を描く第一部が終り、Paul とその恋人になるべき Miriam, 及び Clara の三人と母親との心理的葛藤へとテーマは展開して行く。

Paul はウィリー農場の Leivers 家の家族と親しくなる。そこで初恋の女性 Miriam と出会い、心が惹かれて行く。彼女は Paul と精神的に共鳴し合う心情の持ち主と描かれる。又神秘的なものの考え方をしがちな母親の影響を多分に受けて総ての物事を宗教的次元で捉える傾向のある少女でもある。ロマンチックな心を内に秘め、'a Walter Scott heroine being loved by men with helmets or with plumes in their caps' を心に空想し自分のことは 'something of a princess turned into a swine-girl' と想像している。現在の惨めな生活から地位や富によって這い上がれ

ないのなら、学問によって自分の自負心を満足させ、知識によって王女の如き誇りを持ちたいと願っている。

それ故、ハイスクールに席を置く Paul を羨み、心を惹かれる。兄弟達に馬鹿にされたり、Paul に単なる 'a swine-girl' などと思われたりしないように精一杯努力した。このような強い自意識に捕えられていても無力な彼女としては、必然的に自分だけの小さな世界に閉じ籠らざるを得なかった。神を信じる信仰心の篤い彼女は、神との交流に心の安らぎを得ていたのである。そして自卑の心と自尊心が、内面でせめぎ合いながらも共存し、それに加えて篤い宗教心の持ち主である Miriam であれば、Paul を愛する態度にも彼女の性格がはっきりと現われて来るのは当然であろう。

Then he was so ill, and she felt he would be weak. Then she would be stronger than he. Then she could love him. If she could be mistress of him in his weakness, take care of him, if he could depend on her, if she could, as it were, have him in her arms, how she would love him! (ibid.)

彼女は弱っている彼に慈悲の手をたれ、抱きしめてやろうと思う。それは自らを高みに置き優位な立場を保って、彼を愛してやろうという主我的な発想である。彼女の Paul の愛し方は最後迄こうであった。

Miriam の持つ、魂と肉体の純潔を象徴する宗教的雰囲気、彼女と Paul の結び付きに決定的な要因を与える。二人には性的な次元からではなく、'their common feeling for something in nature' という純粹に潔癖な感情から、愛が芽生える。即ち二人の愛は精神的、観念的なものであって肉体的なものではない。

Lawrence は第二部に於ては、第一部でのリアリスティックな情景描写から、象徴的な手法を用い、特に Paul と Miriam の関わり合い及び情感を写し出すのに、鳥や花のような自然界の生き物を象徴的な道具として使っている。彼らの身体以外のものを媒介として、そこに接点を見出す場面で、彼らについての情景は安定し、その姿をより明らかにする。

Paul は宗教的雰囲気を持つ Mrs Leivers の魔力に捕えられてしまう。彼女と共にいると彼にはすべてのものが 'a religious and intensified meaning' を持って見えた。彼らは二人共 'to sift the vital fact from an experience' (II, VII) するところが似ていた。Miriam はその母の娘である。三人での散歩の途中、みそさざい⁽⁸⁾の巣を見付けた時、Paul は巣の中に手を入れ、 'It's almost as if you were feeling inside the live body of the bird, it's so warm.' (ibid.) という感想をもらす。自然との交感で Paul はそのやさしさ、暖かさを実感する。この場面は後の第二部第九章で「つぐみ」の卵を手取る情景に繋がり、更に後には *Lady Chatterley's Lover* の Connie が森番 Mellors の飼育している雉の雛を手にする場面に至るのである。この巣は新しい生命を象徴しているように思えた。

The nest seemed to start into life for the two women. After that, Miriam came to see it every day. It seemed so close to her, (ibid.)

Miriam は Paul に対する愛の故に無意識に、自分の自然に対する感情を彼のそれに合せてゆく。二人だけで散歩している時、Paul は金色の扇のように広がったきんぽうげの若芽を見る。

“I like them”, he said, “when their petals go flat back with the sunshine. They seemed to be pressing themselves at the sun”,

And then the celandines ever after drew her with a little spell. Anthropomorphic as she was, she stimulated him into appreciating things thus, and then they lived for her. She seemed to need things kindling in her imagination or in her soul before she felt she had them. And she was cut off from ordinary life by her religious intensity which made the world for her either a nunnery garden or a paradise, where sin and knowledge were not, or else an ugly, cruel thing. (ibid.)

二人の共感はこうして始った。Paul は感覚的に、Miriam は観念的に。この相違は最後迄変ることはない。

この物語に於て大筋では、Paul は母にその魂を掴まれているので、Miriam に対して感覚的なものや性的な本能を満たそうと求めており、一方 Miriam は精神主義的で禁欲的なので、それを否定し拒絶するという図式が想起される、がしかし必ずしも単純にそうとばかりは言えないところがある。

ウィリー農場の納屋で二人はブランコに乗る。この行為は運動の喜び、人の親密な関わり、生命の享受ひいては性的情感の交流を表現しているようである。ここで Paul と Miriam の心は暖く通い合う。Paul はこの運動に積極的であり、大いに楽しみ熱中する。それはあたかも彼の潜在的な性の欲求を満足させているかのようである。一方 Miriam は非常に消極的で、彼女の性的欲求の稀薄さを示している。彼女が乗っている時、Paul が押してくれる。

She felt the accuracy with which he caught her, exactly at the right moment, and the exactly proportionate strength of his thrust, and she was afraid. Down to her bowels went the hot wave of fear. She was in his hands. Again, firm and inevitable came the thrust at the right moment. She gripped the rope, almost swooning. (ibid.)

‘the hot wave of fear’ を臍に感じた彼女は、性的衝動とその行為に対する恐怖を抱いたのには違いなからうが、そのすぐ後の文章にこうある――

There was something fascinating to her in him. For the moment he was nothing but a piece of swinging stuff; not a particle of him that did not swing. She could never lose herself so, nor could her brothers. It roused a warmth in her. It were almost as if he were a flame that had lit a warmth in her whilst he swung in the middle air. (ibid.)

彼女の頭在意識で性的衝動に対する嫌悪感にも拘らず、潜在意識に於けるそれに対する欲求が ‘a flame that had lit a warmth in her’ という形で姿を現わしている。

ウィングフィールド荘園への遠足の時、そばを歩いていた Paul が Miriam の持っていた網目

の袋に手を入れる。彼女は Annie がねたまし気にそれを見ているのを感じると、‘the place was golden as a vision.’(II, VII) という誇らしい気持となる。これに通じる気持を姉の Agatha に辛辣に皮肉られる――

…there was a serpent in her Eden. She searched earnestly in herself to see if she wanted Paul Morel. She felt there would be some disgrace in it. Full of twisted feeling, she was afraid she did want him. She stood self-convicted. Then came an agony of new shame. She shrank within herself in a coil of torture. Did she want Paul Morel, and did he know she wanted him? What a subtle infamy upon her. She felt as if her whole soul coiled into knots of shame. (ibid.)

感性では Paul を明らかに欲しているのに、彼女が抱いている理性的観念ではそれを否定しようとしている。こういう「不名誉な」また「恥辱的な」感情を抱いた時、彼女は ‘Make me love him splendidly, because he is Thy son.’ (ibid.) と神にその正当性を求めて祈らなくては行かない。このように彼女が悩み、神に祈れば祈る程彼女の Paul への執着心は露わになり、明白になって行く。そして Paul を愛するが故の苦しみも増して行くのである。

Paul は Miriam との間柄を単なる ‘a platonic friendship’ としか見ておらず、自分達は ‘lovers’ ではなく ‘friends’ だと主張する。Miriam は自分達の関係が実際は恋人同士であると分っているが、Paul はそれが分らない。しかし、Miriam の態度に Paul がそう思わざるを得ないようにする何かが存在しているのである。

With Miriam he was always on the high plane of abstraction, when his natural fire of love was transmitted into the fine stream of thought. She would have it so. If he were jolly and, as she put it, flippant, she waited till he came back to her, till the change had taken place in him again, and he was wrestling with his own soul, frowning, passionate in his desire for understanding. And in this passion for understanding her soul lay close to his; she had him all to herself. But he must be made abstract first.

Then, if she put her arm in his, it caused him almost torture. His consciousness seemed to split. The place where she was touching him ran hot with friction. He was one internecine battle, and he became cruel to her because of it. (ibid.)

作者は Paul のことを ‘a fool who did not know what was happening to himself’ と書いているが、彼は Miriam に対する ‘his natural fire of love’ を ‘the fine stream of thought’ に変化させないと、彼女に受け入れられないことに無意識のうちにも気付いている。彼の心が熱くなって、官能的で生命のほとぼしりのような情熱的な愛を感じている時、Miriam は彼が ‘flippant’ であるとして、高度に抽象的な状態になる迄待ち、そこで初めて近寄って来るのである。これでは Miriam が彼の腕をとって歩くことは、Paul にとって拷問に違いなく、彼の意識は分裂せざるを得ない。Paul の情熱的な愛は Miriam の精神的な愛に振り回され、禁欲的になって行き、その本来の姿を見失ってしまうとも言えよう。

更に Paul は当時の立派な男達の例にもれず、社会の一般通念、道徳、宗教が要求する「童貞

感」に拘束されていた。更に社会道徳の基盤としての、因襲的な宗教の影響によって、Paul を含む当時の青年全体が性に対する嫌悪感、忌避の心に縛られていた。それ故、Paul を捕えている「童貞感」は彼一人の特殊な問題ではなく、社会の因襲及び教育が育てたイギリス青年男女の典型的な問題であったのである。一方、作者 Lawrence は 'Being the sons of mothers whose husbands had blundered rather brutally through their feminine sanctities, they were themselves too diffident and shy. (II, xi) のが青年の「童貞感」に縛られていた理由であると、母親の影響を述べているが、当然ここではそれは母の胎内から出て来た時から母に対して抱く子供の無意識的な被支配感であり、Paul の母 Gertrude の意志を持った支配力の影響ではないのは明らかである。ともあれ、これは Paul と Miriam の愛の破滅の底に横たわっている大きな問題の一つであった。

これ迄に考察したように、Paul は禁欲的で Miriam が Paul を欲するという図式が、往々にして垣間見られる。だがこれは作者が意図した Paul が Miriam を欲し Miriam は飽く迄も精神的な愛に固執するという図式の陰にかくれたものである。そしてこれらの二つの図式が表裏一体となって物語が進行して行く。Miriam は Paul に対する肉体的衝動を恥辱ととり、それを神に祈って心を清めようとし、Paul は Miriam に対する性的衝動は苦痛であるとし、自らを高度に抽象的で精神的な状態にすることによって心理的安定を求めている。このように二人の違った人間に究極的には同じような性格が作者によって付与されているのである。性格上の設定が十分に明確に区別されていない。読者は上記のような二つの図式と性格設定の不明確さのため迷路に迷い込んでしまうことになる。又二人の破局の原因が曖昧となり、その責任の所在もぼやけてしまっている。だがこういう幾つかの問題は指摘出来るにしても、Paul と Miriam の性格の枠組は大勢に於ては明白である。そしてその枠組の中で二人の関係は進展して行くのである。

そこで Paul と Miriam の関わり合いを見ながら、作者の二人についての性格設定を探って行こう。彼女は宗教心の篤い精神的な女性であるが、彼女が外部の対象にその愛を表現する時は、相手をすべて吸い尽さずにはおかない強烈な主我的な感情を示す。彼女は弟の Hubert を愛撫するにしても、感情をむき出しに異常な感動の気持を示すのである。Paul はこの極端な感動の表現に痼癢を起し、我慢出来ない。表面上穏やかな Miriam の感情は、活火山のマグマのように、心の底で静かに燃えており、時折激しく荒々しくその姿を表わすのである。こういう性質の感情を持つ Miriam ではあるが、その望む交わりは霊的次元に於けるものである。Miriam の暗く深い目に吸い寄せられるようにして、Paul は彼女と心の触れ合いの時を持つことになる。彼女は見つけておいた野ばらの木を見せるために、Paul を森に誘う。花を見ることで、彼女は一つの霊的経験 (a communion)、自分を感動させるもの、何か神聖なものを彼と分かち合おうとしていた。暫く探した後、

In bosses of ivory and in large splashed stars the roses gleamed on the darkness of

foliage and stems and grass. Paul and Miriam stood close together, silent, and watched. Point after point the steady roses shone out to them, seeming to kindle something in their souls. The dusk came like smoke around, and still did not put out the roses.

Paul looked into Miriam's eyes. She was pale and expectant with wonder, her lips were parted, and her dark eyes lay open to him. His look seemed to travel down into her. Her soul quivered. It was the communion she wanted. He turned aside, as if pained. He turned to the bush. (ibid.)

そして Miriam は感激の余り, 'She lifted her hand impulsively to the flowers, she went forward and touched them in worship.' Paul は森の中から広々と開けた野原に出て, それ迄感じていた息苦しさから解放されると同時に 'a delicious delirium in his veins' のようなものを感じるのであった。自然を媒介にして, 彼ら二人の霊の交流 (a communion) が行われた。だがここでは, 自然と観念的間接的な接触をしたのではなく, 身体的感覺的な直接手段を以て交感を行ったのである。Miriam の求めた所謂靈的経験の霊の本質はこのような官能的性質を持ったものであることが, ここで明らかである。

Miriam は野ばらに衝動的に手を差出し祈るような気持でそれに触れるが, この彼女の行為は後に Paul と スウィートピーを見に行った時に, より多くの意味を持って来る。Paul がスウィートピーの花を摘んでいる後を, 彼女はついて行く。

Miriam followed, breathing the fragrance. To her, flowers appealed with such strength she felt she must make them part of herself. When she bent and breathed a flower, it was as if she and the flower were loving each other. Paul hated her for it. There seemed a sort of exposure about the action, something too intimate. (ibid.)

これは未だ Paul の抱いた印象にとどまっておき, 言葉に出して表現されたものではない。だがこれから暫くたって Miriam が黄水仙の花を愛撫する場面では, Paul のこうした気持が Miriam に対する反感を伴って言葉をついて出て来る。この場面に至る迄, 二人の関係は時間の経過はあっても殆ど新しい進展は見られない, 膠着状態に陥っている。Miriam は Paul を独占出来るという希望を持たず, 前途には悲劇と犠牲だけしか見出し得ない。Paul は魂を母親に掴まれ, 現状以上彼女を愛せない。また彼女との交際が母親を傷付けているのに苦しんでいる。こういう一種の危機状態の中で二人は, 彼女の家の裏の荒れた芝生の所で黄水仙を見る。

Miriam went on her knees before one cluster, took a wild-looking daffodil between her hands, turned up its face of gold to her, and bowed down, caressing it with her mouth and cheeks and brow. He stood aside, with his hands in his pockets, watching her. One after another she turned up to him the faces of the yellow, bursten flowers appealingly, fondling them lavishly all the while. (II, ix)

花に接する度に Miriam は撫でまわし, その魂を抜き取ってしまうかのようなのである。

"Why must you always be fondling things?" he said irritably.

"But I love to touch them", she replied, hurt.

“Can you never like things without clutching them as if you wanted to pull the heart out of them? Why don't you have a bit more restraint, or reserve, or something?”

She looked up at him full of pain, then continued slowly to stroke her lips against a ruffled flower. Their scent, as she smelled it, was so much kinder than he; it almost made her cry.

“You wheedle the soul out of things”, he said. “I would never wheedle—at any rate, I'd go straight” (ibid.)

Paul は堰が切れたように言いつのる。“You're always begging things to love you as if you were a beggar for love. Even the flowers, you have to fawn on them——” と言った後、最後には次のように極言する。

“You don't want to love——your eternal and abnormal craving is to be loved. You aren't positive, you're negative. You absorb, absorb, as if you must fill yourself up with love, because you've got a shortage somewhere”. (ibid.)

Miriam は自分の関心の向く対象物を手に取って愛撫し、甘言を弄して相手を騙す。そして自分の欠けている部分を満たすために、そのものを取り込み、愛を以て自分の空っぽのところを満そうとしている。Paul はそれを見るのが我慢出来ないのである。作者 Lawrence は常に、他を愛そうという欲求と個性的自我を確立せんという欲求との均衡を問題としている。一方 Miriam は愛そうという欲求を以て、相手の個性的自我を呑み尽し自己に相手を従属させてしまうような女性である。Paul の母 Gertrude は早い時期から、彼女の本性を見抜いて Miriam が Paul の全てを吸い尽してしまうと思い、苦しんでいる。

“She's not like an ordinary woman, who can leave me my share in him. She wants to absorb him. She wants to draw him out and absorb him till there is nothing left of him, even for himself. He will never be a man on his own feet——she will suck him up”. So the mother sat, and battled and brooded bitterly. (II, VIII)

そして黄水仙の場面の直前でも、Miriam は Paul の全てを持って行って、少しも残しておいてくれないと、母は息子に訴えかける。母は Miriam との女の闘いのうちに、本能的に彼女の本質を見抜いてしまう。Paul はこの彼女の本性を黄水仙の場面で漸く感知することになる。彼女は相手の魂の全てを手に入れようとするのである。

Miriam は Paul が欲しかった。しかし彼女は精神的な愛を求めているのであって、肉体的な結び付きは彼女にとって第二義的なものでしかない。

She felt she could bear anything for him; she would suffer for him. She put her hand on his knee as he leaned forward in his chair. He took it and kissed it; but it hurt to do so. He felt he was putting himself aside. He sat there sacrificed to her purity, which felt more like nullity. How could he kiss her hand passionately, when it would drive her away, and leave nothing but pain? Yet slowly he drew her to him and kissed her. (II, XI)

彼女は精神の絆が Paul と結ばれば、他に何の不満もない。それ故、Paul が間接的な表現で

‘Sometime you will have me?’ (ibid.) と彼女に尋ねても、柔かく否定されるのは当然過ぎる程当然なことであった。しかし彼女と性的関係を望む Paul は落胆し、心の中に荒涼としたものを感じる。

この場面の暫く前に Paul は Miriam に ‘a letter which could only have been written to her’ と作者が言うような苦悩に満ちた手紙を書いた。これは、確かに愛に苦しみ傷付き、求めても与えられないものを尚も求め続け、精神的に疲れ果て、愛の破局寸前に迄追い込まれた青年が、その恋人に自分の不満や苦しみを一挙に吐露した、余りにも残酷な手紙と言える。

“May I speak of our old, worn love, this last time. It, too, is changing, is it not? Say, has not the body of that love died, and left you its invulnerable soul? You see, I can give you a spirit love, I have given it you this long, long time; but not embodied passion. See, you are a nun. I have given you what I would give a holy nun——as a mystic monk to a mystic nun. Surely you esteem it best. Yet you regret——no, have regretted——the other. In all our relations no body enters. I do not talk to you through the senses——rather through the spirit. That is why we cannot love in the common sense. Ours is not an everyday affection. As yet we are mortal, and to live side by side with one another would be dreadful, for somehow with you I cannot long be trivial, and, you know, to be always beyond this mortal state would be to lose it. If people marry, they must live together as affectionate humans, who may be commonplace with each other without feeling awkward——not as two souls. So I feel it. (II, IX)

母と強い愛の絆に結ばれている Paul は、自分の魂は全て母に預けてしまっている。そこに Miriam が入り込み、同じく Paul の魂を求めて来る。彼女は母親と同じ類の愛を Paul に捧げようとしているのである。その彼女を愛そうとすれば、母と彼女の二人に魂を奪われかねない。彼の肉体は求める対象もなく、魂と切り離されたまま宙に浮いた形となってしまう。彼は肉体的な魂としてか、Miriam と交際し得ない。彼女はそれしか望んでいないのである。彼が「血が燃え立つ」青春の時に至っても、「接吻にも耐えられない」Miriam は、Paul と精神的な愛しか交わせない。彼の肉体は閉塞状態に陥り、殆ど窒息寸前となりこの手紙が書かれたのである。肉体と精神の葛藤と分離。それは父親—母親—息子という関係から、先ず父親(=肉体)と母親(=精神)の相克と決裂を経て、息子の心の中での肉体と精神の乖離に至るという Paul の根源的な運命と合致するのである。

この後の二人の関係は断続的に継続し、最終的には肉体関係をも結ぶこととなる。だが Miriam はそれを自らは望まず、又重要だとも思っていない。反対に彼の欲望を満してやることは、二人の愛を破滅させてしまうだろうと考えている。Paul は満足すれば彼女から去ってしまうにしても、‘Possession was a great moment in life. All strong emotions concentrated there’. (II, XI) という彼の言葉に彼女は神意を感じて、宗教的な気持で彼の犠牲となる決心をした。

He stood against a pine-tree trunk and took her in his arms. She relinquished herself

to him, but it was a sacrifice in which she felt something of horror. This thick-voiced, oblivious man was a stranger to her.

Later it began to rain. The pine-trees smelled very strong. Paul lay with his head on the ground, on the dead pine needles, listening to the sharp hiss of the rain—a steady, keen noise. His heart was down, very heavy. Now he realised that she had not been with him all the time, that her soul had stood apart, in a sort of horror. He was physically at rest, but no more. Very dreary at heart, very sad, and very tender, his fingers wandered over her face pitifully. Now again she loved him deeply. (ibid.)

こういう結び付きの後、満足感からは程遠い虚しさと罪悪感だけが残る、Paul は益々いらだちを深めて行く。ウッドリントンでの数日間、二人は夫婦のような生活をするが、その間 Paul にとって Miriam は尼僧であり聖なる母であって、真の恋人でないことを彼は痛感する。二人の気持は結ばれることなく、只空しくすれ違うのみであった。そして 'If he would have her, he had to put her aside'. というのであれば、これ以上二人の愛を育てて行くのは不可能であろう。当然この短い Miriam との生活の後、Paul は彼女と別れるのである。そして彼は殆どまっすぐに Clara に近付いて行く。

Clara は Miriam と違って官能的で、性の喜びを享受することに積極的である。まるで複雑な生き物みたいにからみ合いながら流れるトレント川のほとりの青々とした草の上で Paul は初めて Clara と抱き合う。

She turned to him with a splendid movement. Her mouth was offered him, and her throat ; her eyes were half-shut ; her breast was tilted as if it asked for him. He flashed with a small laugh, shut his eyes, and met her in a long, whole kiss. Her mouth fused with his ; their bodies were sealed and annealed. It was some minutes before they withdrew. (II, XII)

Paul は Clara との交渉で Miriam とでは不可能であった血のうずきを静め肉体的欲望を満足させることが出来た。だが如何に Clara によって Paul が肉体的満足を得たとしても、それは魂の問題とは別の次元にあった。Miriam に魂の自立を妨げられそうになった Paul はそれに懲りて、Clara には魂を奪われまいと極力気を遣っている。彼は母と Miriam に魂を捕われていたからもう Clara には渡せない。というより、自己の確立のため誰にも渡すまいとしているのである。Clara は昼も夜も、仕事であって彼を求めて来る。Paul は性的関係を仕事とは峻別しているため、昼中の求愛は彼を窒息しそうな気持ちにさせる。彼女は Paul に 'When I had Baxter, actually had him, then I did feel as if I had all of him. (II, XIII) と訴えるが、彼は所有されることを拒否する。Clara も最終的には Miriam と同様に、Paul の魂を奪おうとしている。精神的愛と肉体的愛は各々別々に完全な愛を成就することが出来ないと知り、Paul は Clara と破局を迎えざるを得ない。

Miriam と Clara とともに愛の成就が出来ずに悶々としていた頃、彼の最愛の恋人とも言うべき

母は床に伏していた。不治の病に蝕まれ、最早生命をとりとめる術は全くない。母の苦しみを見かねて、Paul は姉の Annie と相談し、定量以上のモルヒネを牛乳にまぜて飲ませる。そして母は大きな歎をかい、翌日死んだ。

Paul は母を苦しみから解放してやることで、自分自身をも母の愛の呪縛から解放したのである。魂を自由にし独立させたいという強い意志が、母を死に至らしめ、自分と母とを自由にし自分達の苦しみに終止符を打たせたのである。もう Paul は誰にも自分の魂を渡そうとしない。Miriam が母の死後、Paul に結婚しようと言う。だが彼女は相変らず自分を彼の犠牲にしようとする。結婚はその手段に過ぎない。

He felt, in leaving her, he was defrauding her of life. But he knew that, in staying, stifling the inner, desperate man, he was denying his own life. And he did not hope to give life to her by denying his own. (II, xv)

彼は自己の独立と自由な立場を確保することを選んだのである。

彼のすべてを所有しようとした三人の女性、母、Miriam そして Clara の支配から独立した Paul は、今や新しい誕生に直面している。精神的愛と肉体的愛の融和や和合とは程遠い葛藤と相克、そして分裂。全一な愛の姿を否定され、歪められた愛の苦悩。最後に母の死。心の依り所であった母が死に、糸の切れた凧のように支えを失った Paul は茫然自失状態に陥り、瞬間精神的死を体験する。だが既にこれら三人の女性との愛の試練を通して、彼は内面的成長を遂げており、絶望の淵から肉体的な死へ飛び込むことをせず、そこからはい上って、新しい人間、即ち芸術家として誕生して行く。

“Mother!” he whispered——“mother!”

She was the only thing that held him up, himself, amid all this. And she was gone, intermingled herself. He wanted her to touch him, have him alongside with her.

But no, he would not give in. Turning sharply, he walked towards the city's gold phosphorescence. His fists were shut, his mouth set fast. He would not take that direction, to the darkness, to follow her. He walked towards the faintly humming, glowing town, quickly. (II, xv)

母の死の後を追って行こうという死の誘惑に打ち勝って、決然として踵をめぐらせ闇の世界に背を向けた Paul は、母の面影を振り捨てて黄金色の燐光を発する町の方へ向って行く。それは眩しく輝く未来への旅立ちであり、真実の愛の探索への門出となるものであった。

註(1) Letter to Sydney Pawling, 18 October, 1910 (*The Cambridge Edition: The Letters of D. H. Lawrence*, vol. I, p. 184. 以下 *Letters I* と省略)

(2) Letter to Edward Garnett, 15 October 1912 (*Letters I*, p. 462)

(3) Letter to Edward Garnett, 19 November 1912 (*Letters I*, pp. 476-477) この手紙の日付けは *The Letters of D. H. Lawrence* edited by Aldous Huxley でも *The Collected Letters of D. H. Lawrence* edited by Harry T. Moore でも 14 Nov. 1912 となっているが *The Cambridge Edition*では 19 Nov. 1912 となっている。

(4) *Letters I*, p. 477.

(5) 初期の草稿を読んだ Jessie Chambers は次のように書いている。

The whole thing was somehow tied up. The characters were locked together in a frustrating bondage, and there seemed no way out. The writing oppressed me with a sense of strain. It was extremely tired writing. I was sure that Lawrence had had to force himself to do it. The spontaneity that I had come to regard as the distinguishing feature of his writing was quite lacking. He was telling the story of his mother's married life, but the telling seemed to be at second hand, and lacked the living touch. I could not help feeling that his treatment of the theme was far behind the reality in vividness and dramatic strength. Now and again he seemed to strike a curious, half-apologetic note, bordering on the sentimental ……(E. T. : *D. H. Lawrence ; A Personal Record* : p. 190.) また

The elder brother Ernest, whose short career had always seemed to me most moving and dramatic, was not there at all.

ともある。

Harry T. Moore によると Lawrence の要請に応じて1911年から1912年にかけて Jessie は二人の交際の記憶をノートに綴り Lawrence に渡し、彼の書いた所を訂正してやりもした。その訂正の数は龐大なものにのぼる。 *The Life and Works of D. H. Lawrence* : Appendix D.

(6) 本作品は二部十五章に分かれている。前の数字が部、後の数字が章を表わす。例：(I, 1)=第一部第一章。

(7) 註(3)の Letter 参照。

(8) みそさざいは 'surrection' を表わし得る。Jobes : *Dictionary of Mythology Folklore and Symbols*, p. 1693.

これは本文の引用からも暗示されるように、Paul の過去への訣別と、新しい人生への出発を象徴していると見てよいだろう。

(9) Letter to Jessie Chambers, 28 January 1908 (*Letters I*, p. 42)

When I look at you, what I see is not the kissable and embraceable part of you, although it is so fine to look at, with the silken toss of hair curling over your ears. What I see is the deep spirit within. That I love and can go on loving all my life…… Look, you are a nun, I give you what I would give a holy nun. So you must let me marry a woman I can kiss and embrace and make the mother of my children…… Lawrence は上記のようにこれとそっくりな手紙を Jessie Chambers 宛に彼女の誕生日の前日に書いている。

参考書誌

1. *Sons and Lovers ; The Phoenix Edition of D. H. Lawrence* : Heinemann : 1969.
2. Boulton, James T. (ed.) : *The Cambridge Edition : The Letters of D. H. Lawrence* ; vol. I, 1901-13 : Cambridge University Press : 1979.
3. Huxley, Aldous (ed.) : *The Letters of D. H. Lawrence* : Heinemann : 1956.
4. Moore, Harry T. (ed.) : *The Collected Letters of D. H. Lawrence* ; vol. I : Heinemann : 1965.
5. Aldington, Richard : *D. H. Lawrence ; Portrait of A Genius But…* : Collier : 1967.
6. Chambers, Jessie : *D. H. Lawrence ; A Personal Record* : Frank Cass : 1965.
7. Corke, Helen : *D. H. Lawrence : The Croydon Years* : University of Texas Press : 1965.
8. Daleski, H. M. : *The Forked Flame : A Study of D. H. Lawrence* : Faber & Faber : 1965.
9. Draper, R. P. (ed.) : *D. H. Lawrence : The Critical Heritage* : Routledge & Kegan Paul : 1970.
10. Holderness, Graham : *Who's Who in D. H. Lawrence* : Hamish Hamilton : 1976.
11. Hough, Graham : *The Dark Sun ; A Study of D. H. Lawrence* : Duckworth : 1956.
12. Lawrence, Frieda : *Not I, But The Wind*. … : Cedric Chivers : 1964.
13. Leavis, F. R. : *D. H. Lawrence ; Novelist* : Chatto & Windus : 1967.
14. Moore, Harry T. : *The Life and Works of D. H. Lawrence* : George Allen & Unwin : 1951.
15. — : *The Intelligent Heart* : Farrar, Straus and Young : 1954.
16. Murry, J. Middleton : *D. H. Lawrence ; Son of Woman* : Jonathan Cape : 1936.
17. Tiverton, Willam : *D. H. Lawrence and Human Existence* : Rockliff : 1951.

18. 入江隆則：見者ロレンス：講談社：1974.
19. 井上義夫：ロレンス：小沢書店：1983.
20. 北沢滋久：D. H. ロレンス：墨水書房：1973.
21. 倉持三郎：D. H. ロレンス——小説の研究：荒竹出版：1976.
22. ——（著訳）：D. H. ロレンス：英潮社：1977.
23. 西村孝次（編）：ロレンス：研究社：1971.
24. 羽矢謙一：D. H.ロレンスの世界：評論社：1978.
25. 村岡 勇：D. H.ロレンス：研究社：1970.
26. 森 晴秀：ロレンスの舞台：山口書店：1978.
27. 山川鴻三：思想の冒険：研究社：1974.

（跡見学園短期大学昭和62年度特別研究助成費による）